

もの申す科学者とガリレオの名誉

オーレオ、オレオレオレオ、ジョルジョー、ジョルジョー！

ノーベル物理学賞の発表日。真鍋淑郎さん(90)が米国の自宅でインタビュを受けていたところ、同時受賞が決まったローマ大学教授のジョルジョ・パリージさん(76)は、大学内のバルコニーから手を振っていた。学生たちの歓声に促され、少し恥ずかしそうにあいさつした。

「教えてみたら、私にはこれまで317人の共同研究者がいました。この協力なくしていまの私はあり得ません。受賞を機に、イタリア政府には次の予算で科学者への研究費を増やしてもらいたい」理論物理学者のパリージさんは、イタリアの大学院生や若手研究者の間で絶大な人気がある。数々の業績や飾らない人柄もあるが、一番の理由は、彼が「もの申す科学者」だからだと思う。「科学は実社会から乖離した存在では

ない」が持論で、専門外の社会問題などでも積極的に意見してきた。政治家や財界人など、批判の対象を選ばない。なかでも「伝説」として語られているのは、13年前に起きた「ローマ教皇の大学訪問阻止事件」である。

2008年1月。当時のローマ教皇ベネディクト16世はローマ大学の学長に招待され、始業式で演説する予定だった。これに異を唱えたのが、パリージさんを含む同大の教授ら67人だ。「あらゆる公権力や勢力から独立し、自主・自立を保つ大学に宗教を持ち込むべきではない」とする書簡を学長へ提出した。一方、保守派政治家らは「教皇にも表現の自由がある」などと反発。大論争の末、パチカン(ローマ教皇庁)は直前になって「教皇訪問の延期」を発表した。

パチカンのおひさまとイタリアで「科学」と「宗教」は独特の緊張関係にある。原因の一つは、地動説を支持して1633年に有罪判決が下ったガリレオ・ガリレイの宗教裁判にまでさかのぼる。パリージさんは教皇訪問騒動のさなかに、両者の関係をこう語った。

「この50年ほど、科学と宗教は停戦状態を保ってきた。特に、進化論で『世俗的』な立場をとったヨハネ・パウロ2世の時代は明確だった。その停戦を破ったのは、カトリック教会の方だ」 「後任のベネディクト16世は教皇になる前の1990年、演説で『ガリレオの宗教裁判は妥当で正当だった』とする哲学者の見解を引用した。これは、科学者を怒らせ、侮辱する言葉だ」 「停戦」をもたらしたのは、教会の近代化を目指して1962〜65年に開催された第2バチカン公会議だ。その最後に



「花にたくして」 絵・皆川明

公布された「現代世界憲章」には、「自分たちの宗教生活と道徳が科学知識やたえず進歩する技術と同じ歩調で進むようにしなければならない」と記された。これに沿って「改革」したのが、ベネディクト16世の1代前の教皇ヨハネ・パウロ2世だ。「進化論はキリスト教と対立しない」としたほか、ガリレオの名誉を359年ぶりに回復させた。いまさら保守派教皇に時計の針を戻されてはたまらない。パリージさんに

は、そんな危機感があつたのだろう。

今年のノーベル物理学賞が気象学の成果に贈られることは、世界を驚かせた。地球温暖化対策が注目される時代に、変化の波はパチカンにも訪れている。現教皇フランシスコ(84)は、地球環境保護に関する回勅(教皇の公文書)を出すなど、温暖化問題への取り組みに熱心だ。今日から英国で始まる国連気候変動枠組み条約締約国会議(COP26)を前に、イスラム教やユダヤ教、仏教など主要宗教の代表や科学者ら約40人をパチカンに招いて「信仰と科学—COP26に向けて」と名付けた集いを開いた。共同アピールでは、可能な限り早期に温室効果ガスの排出量を実質ゼロにすることを各国政府へ求めた。宗教指導者ら自身も環境教育に力を入れ、信者に呼びかけることなどを誓約した。「地球は回っていた」と教皇が公式に名誉回復させてから、30年弱でここまで来たのだ。その陰には、近代科学の祖を誇りに闘ってきた科学者たちがいる。